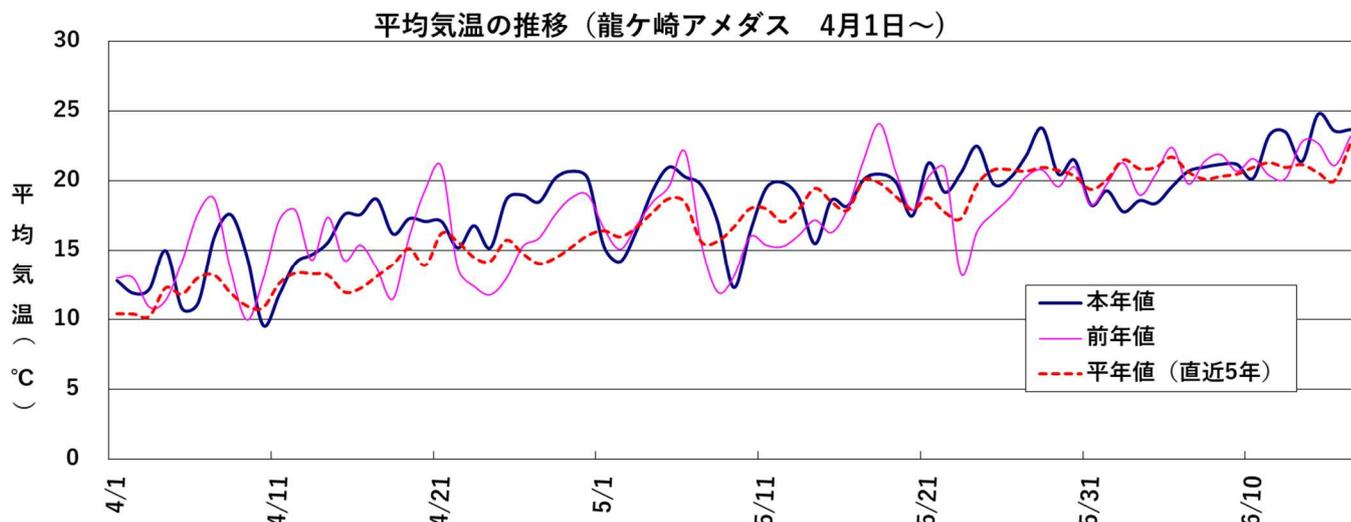


# 令和6年度 水稻生育状況と今後の管理について (追肥時期)

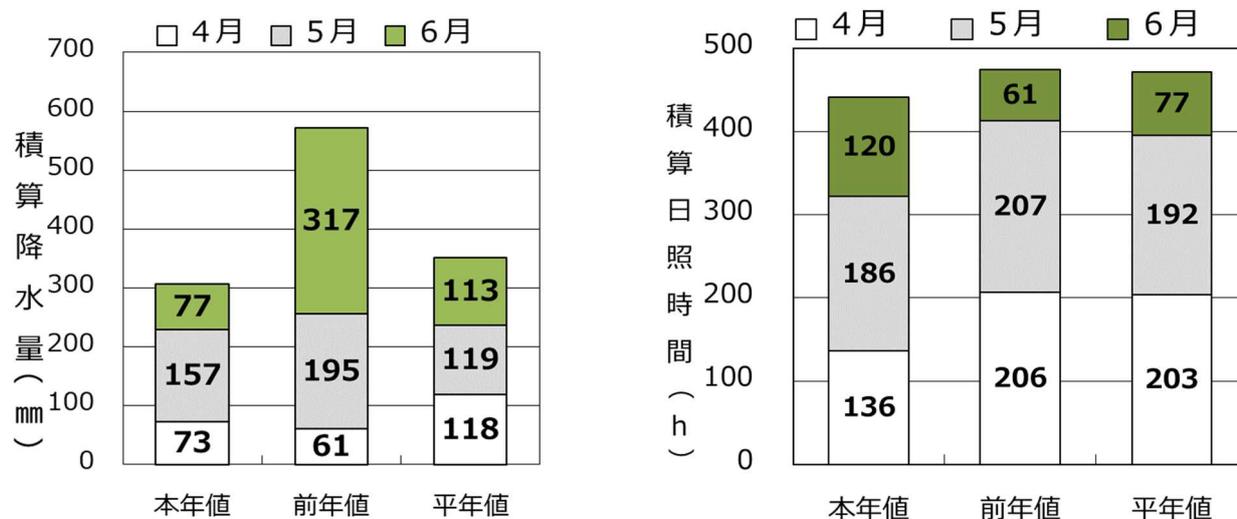
令和6年6月18日(火)  
稲敷地域農業改良普及センター

## 1. 本年の気象状況 [4/1～6/14]

### (1) 日別平均気温の推移



### (2) 降水量、日照時間の積算値



気象状況	4月1日～6月16日	
	平年比	(参考) 前年比
平均気温	+1.3℃ (やや高い)	+0.6℃
降水量	87% (少ない)	53%
日照時間	94% (やや少ない)	93%

- 今後の気象予報 (関東甲信地方の1ヶ月予報: 6/13 気象庁発表【予報期間: 6/15～7/14】)
  - ・ 向こう1か月の平均気温は高く、降水量や日照時間はほぼ平年並の見込み。
  - ・ 期間の前半は気温がかなり高くなる見込み。

#### <病害虫防除所発表の病害虫発生予報 (6月号) より>

- ・ ヒメトビウンカ: 発生時期は早く、発生量は平年並～やや多い。
- ・ ニカメイガ: 発生量はやや多い。

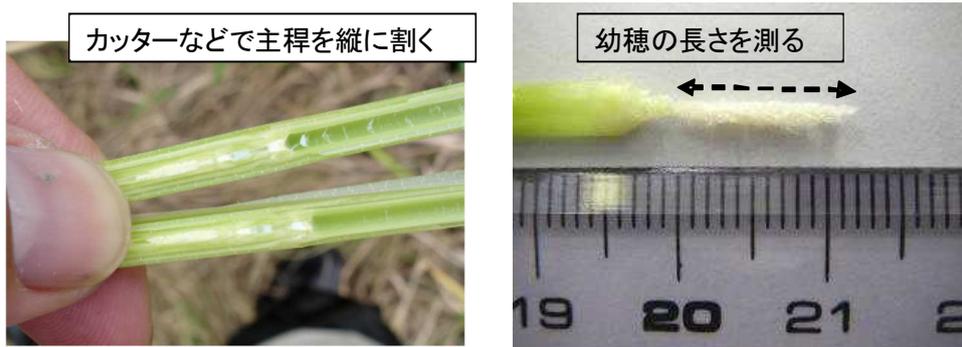
## 2. 今後の管理

### (1) 穂肥

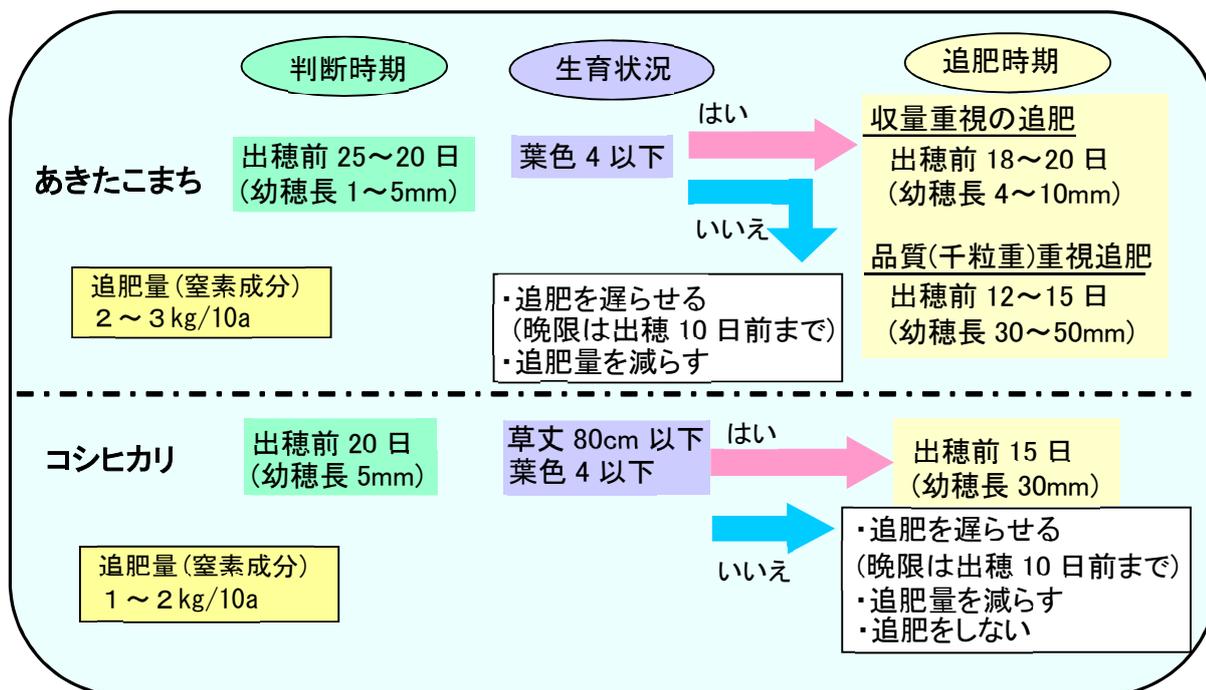
穂肥の適期施用 ⇒ 一穂粒数の増加や千粒重、登熟歩合の向上  
 不適切なタイミングや過剰な追肥 ⇒ 倒伏、食味・品質の低下。

#### ★幼穂の長さの測り方

生育が中庸な株の一番長い茎(主稈)を根元から採取し、カッターで根側から縦に割いて、幼穂の長さを測る。4~5本の平均をとる。



### (2) 追肥時期及び量の判定方法

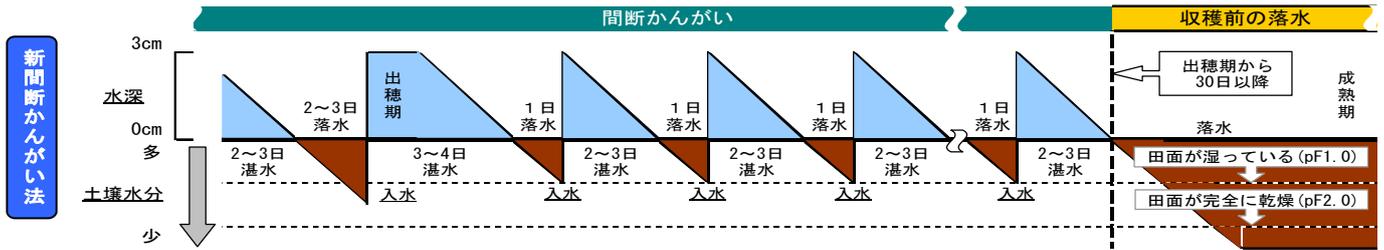


※基肥一発肥料を使用した場合は、追肥しない。

【NOTE】

### (3) 登熟期の水管理～間断かんがい法～

#### 登熟期の間断かんがい法のイメージ(例: やや砂目の土壤)



(参考) 農業研究所主要成果 「コシヒカリの乳白粒発生を軽減する登熟期の間断かんがい法」

- ・ 出穂直前から出穂期の3～4日間は、水不足にならないように湛水を保つ。
- ・ 登熟期は、間断かんがいを行う。田面が乾く前に入水し、自然落水を繰り返す。入水時期の田面の感触は、やや砂目の土壤では水が残っていないものの、田面に触れると湿り気を感じる程度。⇒乳白粒や胴割粒、白米ひび割れ粒の発生を軽減
- ・ 暗きよのあるほ場は、水甲の調節により水深を調整する。降雨が続いて湛水状態が続く場合は排水する。

### (4) 障害型冷害について

【障害型冷害とは】

- ・ 低温により花粉などが障害を受け、不稔粒が発生する冷害。特に、出穂 15～10 日前の減数分裂期に 17℃以下の低温に遭うと多発する。令和元年は 7 月上中旬に低温日が続いたため、7 月中下旬出穂の多くの品種に不稔が発生し、低収の一因となった。
- ・ 幼穂形成期（出穂の 25～16 日前）以降に日平均気温が 20℃以下の日が続く、もしくは最低気温 17℃以下に下がるなど、低温が予想される場合、障害型冷害を防止するため深水管理とし、幼穂の保温に努める。

水稻の生育ステージ	水深の目安
幼穂形成期から減数分裂期前まで（出穂 25～16 日前） （前歴深水）	10cm 程度
減数分裂期（冷害危険期）（出穂 15～10 日前）	できれば 20cm 程度

主要品種の耐冷性：

耐冷性	弱	やや弱	中	やや強	極強
品種	にじのきらめき	夢あおば	ちほみのり	あきたこまち	コシヒカリ ミルクィクィーン

【NOTE】

## (5) 病害防除

### いもち病

【被害】 葉いもちは、縦長の紡錘形（ひし型）の病斑を生じる。例年梅雨入り後の6月下旬から発生し始め、7月に発生が最も多くなる。

その後、出穂期前後に降雨が続くと、穂いもちが多発し減収する。

【原因】 前年の籾や被害わらでいもち病菌が越冬し、伝染源となる。

低温（20～25℃）・日照不足・多湿等の気象条件で発生が助長される。

【防除】

① 葉いもち：イネの葉色が濃い所や水温が低い水口等を観察し、初発の確認に努め、発生初期に防除を実施する。粒剤による本田防除の適期は初発前～初発時なので、適期を逃さずに防除する。

② 穂いもち：液剤による防除適期は、穂ばらみ末期～穂揃期である。

葉いもちが多発し、上位葉に病斑が見られる圃場では、防除を徹底する。

### 紋枯病

【被害】 地際に近い下部の葉鞘に楕円形の大きな病斑を生じる。

上位の葉鞘まで進展すると、未熟粒の増加や千粒重の低下により減収する。

また、下葉から株元が枯れて倒伏しやすくなる。

【原因】 前年の被害株に形成された菌核が越冬し、伝染源となる。

高温多湿条件で発生が助長される。

【防除】 穂ばらみ期～出穂期に、株元までしっかり薬剤がかかるように散布する。

発生が確認された圃場では、翌年以降、育苗箱施用剤を使用する。

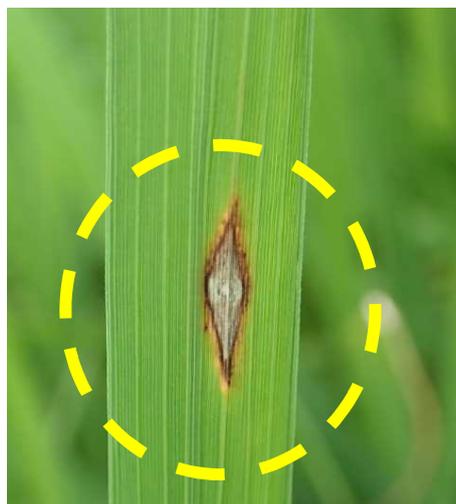
### 縞葉枯病

【被害】 葉に黄白色の縞状の斑紋が生じ、穂が出すくんで不稔となり減収する。

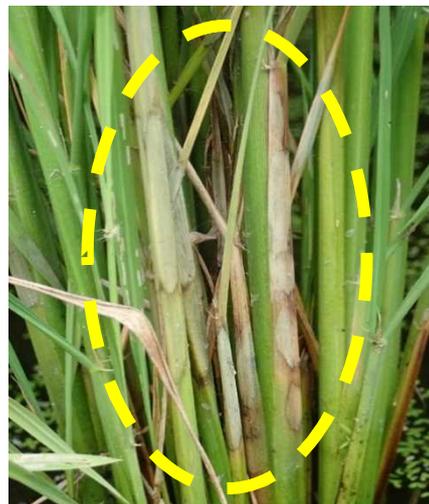
【原因】 ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で保毒虫が水稻を吸汁する事で感染する。

【防除】 育苗箱施薬や本田での防除のほか、水田周辺のイネ科雑草の除草を徹底し、収穫後の刈り株から伸びだす再生稲（ひこばえ）を早めに耕起することでヒメトビウンカの生息・越冬場所を減らす。

水田収穫後の水田の耕起時期は早いほど、水田畦畔におけるヒメトビウンカの越冬量の低減に有効である (R1 茨城県主要成果)。



いもち病



紋枯病

## (6) 害虫防除

### 斑点米カメムシ類

【被害】 籾を吸汁することで不稔や玄米に斑点が生じる。また、被害が多いと品質や収量が低下する。

#### 1) 主食用米・加工用米の防除のポイント

##### ① 畦畔の除草管理

出穂間際の草刈りはカメムシ類をほ場内へ追い込むため、出穂2週間前までに済ませる。

##### ② 薬剤防除 (図1)

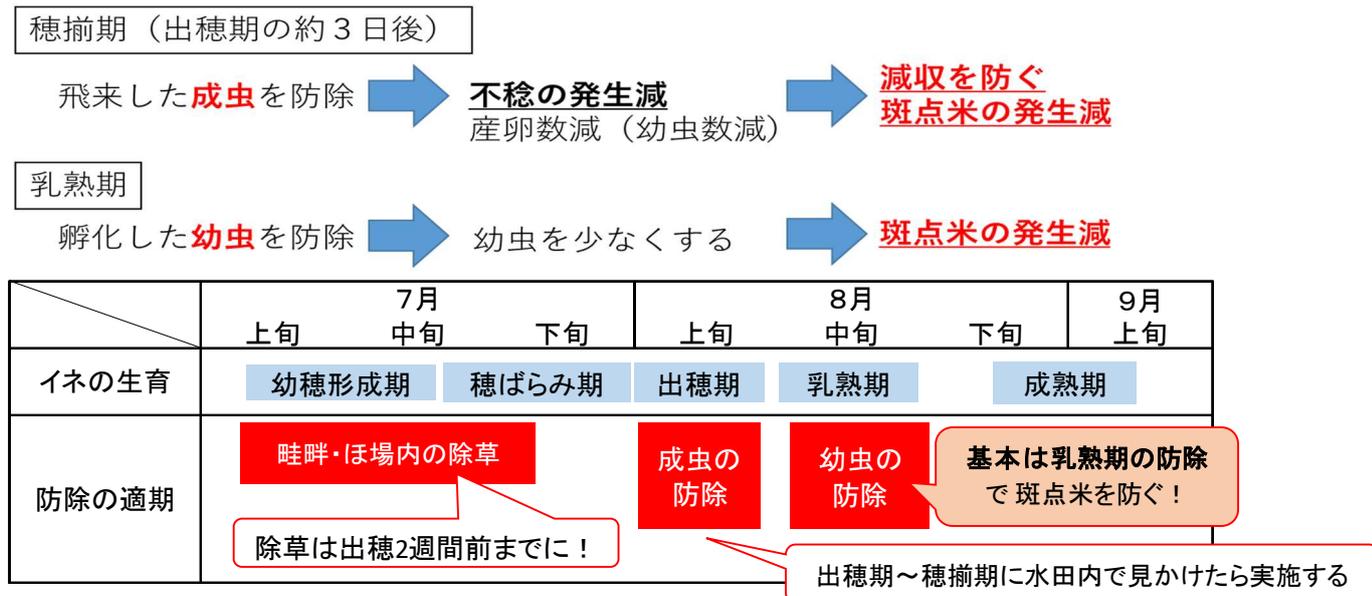


図1 イネの生育ステージと防除適期 (5月上旬移植のコシヒカリの場合)

#### 2) 飼料用米の防除のポイント

##### ① 畦畔の除草管理

主食用米・加工用米と同様に、出穂の2週間前までに済ませる。

##### ② 薬剤防除 (図2)

基本 : 周辺ほ場等から侵入してきた成虫を穂揃期に防除 (減収対策)。

多発生時 : 出穂期以降にカメムシ類を見つけた場合は、直ちに防除 (減収対策)。

さらに、その10日後に追加で防除 (図2◎から●2回に切り替える)。

品種	区分	移植時期	7月			8月			9月			10月		
			上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
あきたこまち	主食用	4月下旬		○	◎									
		5月上旬			○	◎								
コシヒカリ	主食用	4月下旬			○	◎								
		5月上旬			○	◎								
とよめき	加工用	5月上旬			○	◎								
		5月下旬			○	◎								
夢あおば	飼料用	5月下旬			●	◎	●							
		6月中旬					●	◎	●					
月の光等 晩生品種※	飼料用	5月上旬			●	◎	●							
		5月下旬					●	◎	●					
		6月中旬						●	◎	●				

※ □ : 出穂期 ■ : 乳熟期 □ : 収穫時期

◎ : 基本となる防除適期 ○ : 多発生時の追加防除

● : 飼料用米での多発生時の防除 (2回)

※ 晩生品種は「月の光」、「あきだわら」、「あさひの夢」、「オオナリ」、「北陸193号」等

図2 各品種の生育ステージと防除適期